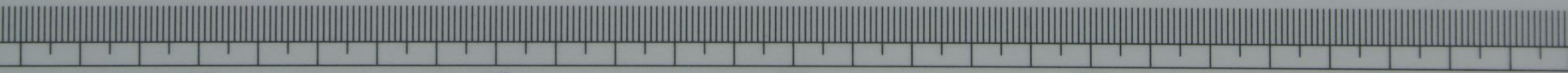




書  
 正  
 月  
 今  
 博  
 物  
 室  
 二  
 月  
 部  
 二

5
529
2



10

15

20

25

30



5  
529

二月部目錄

△印あつハ作借の  
季と持りの人

○養生の法。雨風の考。米の計  
測。妙菜との外人家。重宝のこし  
外々よ。新交ありゆ  
同録ありささど

二月

卦月支調子  
陰陽生異名  
柳

△敬馬藝節。七十二候  
占候

ニ丁

△春分中。七十二候  
天氣占候

ニ丁

二月日令

二月日の定まり。干支の  
まじり。ことと。爰ふありむ

△中和節。酒  
占候

△献生子  
四丁

△上春服  
占候

△吉野餅配  
四丁

△南二月堂行  
占候

△秋奠  
三丁

△初午。櫛行祭  
占候

△水間祭  
六丁

△東福寺。儀法  
占候

△戸耶泰  
七丁

△初午諸祭  
占候

△南都春日祭  
七丁

△江本妙寺詣  
占候

△大原の祭  
八丁

60 65 70 75 80 85 90 95



八幡初卯

踏青節

賜天

萬神都會

行基祭

初年祭

若宮能

祇園八講

泉涌寺倉開能

列見

三月堂水取

涅槃會

佛の別

巖城柱炬

真福寺常樂會

△園禪神祭

迎富

蚕農市

△出代

△二日灸

△新能

△遺教經會

△貴船五穀祭

百花朝

花朝節

△二月の別

△さり佛

△天壽常樂會

△彦山祭

餅花奠

貝寄

浅間祭

天壽聖天會

天神御忌日

天和の節

二月令

彼岸

天王寺祭

時宗踊念佛

男女嫁娶

得子

鶴島の圖

水口祭

△積塔

觀音誕辰

普賢菩薩

△比良八講

△某種御供

△道明寺祭

彼岸迎僧狀

天王寺踊念佛

△社日

△紙鷲

△初雷

候霜

△田畑野山燒

季御讀經

日八廿 日五廿 日二廿 日廿 日九下



草木類 此部より二月三月までの

苗代 同葉更 等 種浸 種并

湯種 種ト 等 種蔭 種並

藍麻 等 藍 種

蒲公 等 杉菜

狗脊 等 枸杞

五加木 等 虎杖

韭 等 蒜 野蒜

水葱 等 薺花

菜の花 等 大根の花

雙草 等 末黒薄

草芳 等 草九若葉 苑

菰の焼原 等 芦角 芦雞

角組芦 等 艾撒

若紫 等 接骨木花

銀杏花 等 紅梅

告紅梅盛文 等 八重梅

座論梅 等 越中梅

黃梅 等 初桜 初花

待花 等 糸櫻

燒桜 等 見桜

一重桜 等 彼岸桜

熊谷桜 等

種植 草木のたけまらう多て接

接穂 等 茄子栽杖

西瓜 等 木 木

さや 等 蓮を植

修樹 等 葉種根と取

月生類 此部より二月三月の

果鳥 等 雉子



△燕 同巢	△引鶴	△孕雀	△孕鹿	△蜂	△蝶	△蟾蜍	△蛙子	△燕鯨	△卷	△丸ろこ
テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ
△歸雁	△鳥巢	△松尾鳥	△鹿角落	△虫	△蛙	△青蛙	△鮎子取	△田螺	△寄居虫	△馬刀
テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	テ

三必用

此部は風雨の占、破軍の  
 他行の心得、作事のうりや料理  
 らん立の法、食物のふりや、其外  
 品をうつし、九日の定まる事、口の日  
 合の部、あり、此部は九日のこと、  
 二月一ヶ月 要用の  
 事とあり、えー

三月目録

二月之部

△此印あり、能備の  
 事とあり、えー

當月、清風、朧月  
 舒して仲陽の氣  
 整、野外へ出て  
 青艸と踏天  
 飛と專小受  
 一則扶陽の  
 術、草木の  
 日、影と受て  
 入、日の影と受て

異名

△仲春 △陽中 △知月 △今月  
 △夾鐘 △驚蟄 △春分

異名註

夾、ハ、甲也、石の物あり、  
 條の、  
 雅曰、二月、為如、  
 春分の、  
 蔵玉、  
 顯昭、  
 月、  
 月、

△梅津月 △衣更着  
 △小草生月 △梅見月 △雪消月  
 △蔵玉 小草生月 顯昭  
 月、

△蔵玉 小草生月 顯昭  
 月、



哥 梅は二月 友則

うぐいすのかよらぬ里の宿あり  
花をさる梅つさ月

哥 蔵王 梅見月 有家

とふ人みな花友の梅見月  
風のよさけを結くまらるる

哥 莫傳 雪消月

もと経てまともえさる土の根の  
ゆきささえ月のはもろれは

梅花のさく本はそりて二月は考

節 驚蟄。七十二候。草木生二  
候。昼夜長短日の出入等左記



○枕姑花の花いらさきまきま  
○倉庚の鳥の枝をさる梅はうみ  
この鳥名こそこれともほし余庚の  
軽鮮ツグミス又カラツグミスといて永

大坂の辺に春鳴くははははははは  
舌のてくさくさうひそに似たり尾

こねとま毛あうはうはうはうは  
小ねとら二月より知る○鷹は

陰類なる梅は陽類の仲春は  
さうさるるゝ感して陰類の鳥

も陽類の梅と髪とるなるは  
仲表時長といつるなり孔記出

妙術 節の日は辰と門恒えか  
の下に挿付まはるる

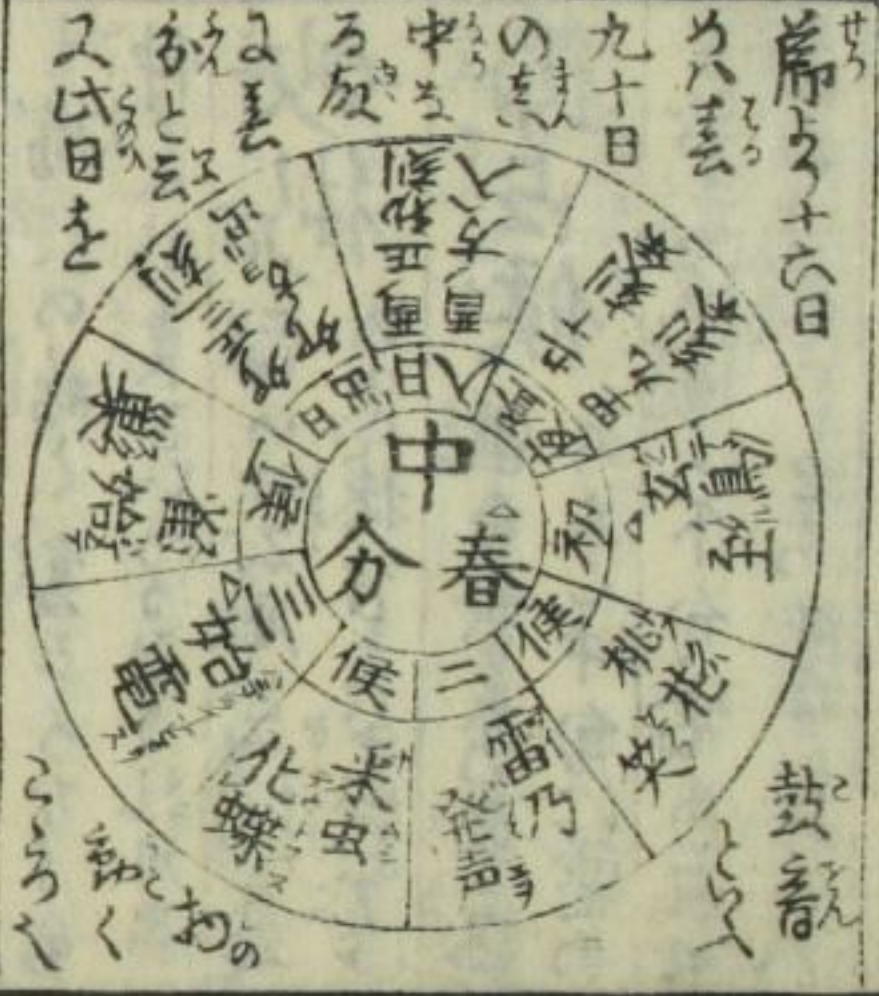
節占候 雷あれは春の寒は  
あまに中旬に雷あり

生はふは傷入下旬雷あれは  
燕ありをさしとら未申に鳴るは

冬来から辰己よかれは  
むしあり雛の方早る



中 春分。七十二候。草木主候。日の  
出寄長経季く丸にうつす



玄鳥のははどりしまの社日に來  
 秋の社に歸るし布中に來りて  
 人衣の粟とひとひるとすむ  
 雷声を震えとて穀粟傳は陰  
 陽相濟る感して雷と名ふる  
 發つらきを雷といひはみよれを  
 電と云まハ陽に入るのとりり  
 を發あり秋ハ陰に入るれりり  
 ままハ發ちり電ハ陰陰陽  
 の接とすなり地ふありて上天よ

從るるおとのまかは日社の  
 さよひにくはれり  
 みいじに  
 るまて  
 春祭  
 先祖ハ  
 一年に一日  
 春分  
 春分  
 春分



天下大平國由たふなり。春  
 飛震の方の生の中に出る。頼  
 かり青龍をわくよれおあさか  
 死に左に坐る。改改いづる。し  
 氣生さるれを年中。雪とくま  
 く。雪のりあしく人氏。天  
 雲の早。日候をバ。熱して  
 て。芳物さら。月ひうら  
 け。ききとる。災ひあり



**日令** 二月日の空のつらとよの  
 空のつらとよのつらとよの

**朝 中和節** 唐世初春を中  
 朝の候のつらとよの

**中和酒** 式日唐世百官長官  
 三月曲水宴

**詩 花隨春令發 鴻度歲陽過**

**獻生子** 唐土民間のもの清  
 袋の百穀果の種

を盛して相共ふふかして  
 らくこれに献生子いふい  
 ふ。この年の年をうけ  
 の後さるるはこれなり

**上春服** 唐主は王公貴戚  
 果より衣服たこま

**天氣占候** 朔日風雨  
 稀ありく

たひ貴し又病あましく流  
 行して人々をばく煩ひ死す



妙術 朔日日出でさる  
てせん二杯のこて又これ出  
だせば疲さうらなふとなく  
無病あり長壽をばらるる  
實に是神仙の奇々妙法なり

吉野餘配 朔日花供  
法の兩行人  
本堂へ出て御供奉幣  
廣庭ふる餅をまぐらり

南都 西京藥師寺造花會  
朔日七日まで金堂中  
いろいろの造り花と樹と大法會  
行々俗西京の花とさうり云

二月堂 南都へ水取  
朔日より十四日まで  
牛王加持の修法あり上七日大像  
觀音下七日小觀音の勤の僧は  
衆の僧とりまへ

大坂 天王寺六時堂修上會  
有朔日より三日迄酉ノ刻  
上丁 釋奠 孔子とさるるといふ  
二月八月西度有  
謚を大先至聖文宣王と申奉る  
うへへ朝廷より年毎に大學生寮  
うて孔子をさるらうへと法  
ては孔子と孔子とさるる大宰  
府つては孔子と関子騫と依  
みまじりしよし延喜式にまじり文  
武天皇大室元年二月よりほ  
まりとなり後花園院寛正年  
中かてゆきとるる應仁の大乱より  
絶る孔子は上一人より下萬民ふ  
至るまで天下萬世の師とされ本  
朝よりさるる後ひいりいへ毒く  
に次第に詳かりし礼記玉制と  
秋葉奠幣とありある秋奠と和  
誦ふおとさるる

大坂 天王寺六時堂修上會  
有朔日より三日迄酉ノ刻

上丁 釋奠 孔子とさるるといふ  
二月八月西度有

謚を大先至聖文宣王と申奉る  
うへへ朝廷より年毎に大學生寮

うて孔子をさるらうへと法  
ては孔子と孔子とさるる大宰

府つては孔子と関子騫と依  
みまじりしよし延喜式にまじり文

武天皇大室元年二月よりほ  
まりとなり後花園院寛正年

中かてゆきとるる應仁の大乱より  
絶る孔子は上一人より下萬民ふ

至るまで天下萬世の師とされ本  
朝よりさるる後ひいりいへ毒く

に次第に詳かりし礼記玉制と  
秋葉奠幣とありある秋奠と和  
誦ふおとさるる



二例 氏余

哥 年中行事 二位中お

かゝるのかかゝるをたふとらりてあて  
ひしやのめとらるまうらるる

伴 飯後の輔を吹す秋莫 嵐雪

秋莫鳥の及喃をせり 野坡

詩 上予詞 陸放翁

燎火明中庭老槐泣殘雨

白頭奉祀事 恐羅劇仰俯

三終樂在懸 再拜肉外姐

誰言千載後 恍若到鄒魯

吾國雖編小 大社祚第土

如何儼章綬 日夜苦蕪楚

藏書如丘山 及物無一羽

吾其可憐哉 去々老農圃

初 稻荷祭 諸國これと

山城伏見のいさなりといへるハ元

明天皇和銅元年二月十一日

は山に祝し一々古曆を以て

考ふるにけ日午と見五穀の

神をれば稲穂とも唱ふ山を

この峯と云本社第一の宇を

虚茅二素盛鳥尊第三大

市姫又田中社四大神併て五

座と云永亨十年三の峯より

今の地より移せりは日ハ洛

中洛外より群衆す市人は

黍粟等の種をうるじあうひ



土人形さうろは深草の名  
おまればなる古の杉と抄りてか  
さうりゆりしと云ともゆりさう

哥 夫木

知衣

いさり山移のあを葉とらばは  
かへるいさるさくらみのもろ人

後拾遺

惠慶

いさり山移のあを葉とらばは  
我ぬぎこし我神もこころよ

頭伴

いさり山移のあを葉とらばは  
あまのひくのかさすきさるる

延喜年月次第風初年系の画貫之  
いさり山移のあを葉とらばは

いさり山移のあを葉とらばは  
まれば底のまかへとらん

狂 初許はくもみれとらばは  
まれば底のまかへとらん

水間祭 和泉國水間觀音  
行基の他聖武天

水間祭

和泉國水間觀音  
行基の他聖武天

皇の勅願此日くはるるのハ  
年此厄難を除く草薺さうり

佛きつひ火や水者海  
の鼻の先 ぼ生 京 眞如堂境  
内いさるる

京東福寺懺法

惠日山号懺  
法六時六根

の罪懺悔する修行は日名画  
兆殿司の画の觀音の像世三幅と

かくるこ又十方の札として火除の  
守とがすの紙と十方の字とか

いて寺内同聚菴よりいだし  
佛記の像懺悔よ本福寺越人

摩耶叅

樺州兔原郡畑原  
村山上よあて佛

母摩耶山切利天上寺と云天  
武天皇の御時法道仙人の創造

なうは日奉詣の人ハ福とねる又  
馬の無難と祈る土産もの昆

布と賣是と摩耶昆布と云  
山の絶頂ハ絶景と撰播又四国の

山の絶頂ハ絶景と撰播又四国の



山海一目にのぞきおるるなり

① 撰 撰版のそ乃もほし 六耶素都文

② 狂 系活の山の下からのるるこれ

はよまやの教考とつゝ 湖春

近江本妙寺詣 今ハ寺院後 たり旧跡ハ

三上山の月よりあり今ハ初 年ハ清和帝命に皇土洞上り

上 南都春日祭 仁明天皇 嘉祥三年

九月始て中臣秀基奏聞にへ 清和天皇貞観十一年十一

月九日庚申の夜初て行宮其 式は次第委し関白藤原家代を

哥 柳川才三首 顯仲 表てんたふいのらきてま日山

松のさそえしいやまこりほく 日 仲実

あめの下たえごそ君いさも(記 かつりの心れ神とまつことを

詞 小車。家人。義。切。南。三。岳。 上 大原野祭 山城乙訓郡 京より七里

許西に春日の社と日神より 仁壽元年二月后宮御所の乃

い而、勸請なしたるなり又 大原野行幸さどもありたり

哥 羊中行支 経賢僧都 さゆぐりやり入味まうと一は心

こやうのそくよ花のさくゆふ 伊勢物語

大原やと一はのふもくふと一は 外代のももれひいづら

詞 系毛車。玉ろろ。夜。ほぶすれ ① 大原を本も女によどれ都 宗周

京 八幡初卯。神系あり伶人 山井多豊安倍とこれと勅

上 園韓神祭 古大内裏の 宮内省有後

林ふをにそく昔ハ二月十日に初 衆議一人なる所に初て事を初る



二月 卯  
左の條に醍醐井通あり 本誌に云  
非人曰くこれ其津のふか 都丈

二不成  
日就日 踏青節 二月民俗酒  
さたづこへて

郊に出で遊賞とて踏青とも  
云聞中二日こもつてはまゝとする

占候 二日雨 あれは蠶桑  
大はは 為水 早刈

迎富 携へ郊外に出で弦歌  
とも樂て暮に久るこれを迎富

賜尺 唐制是日近臣  
采の尺とたまふ

蠶農市 唐土蜀の國に  
二月二日台と西

日かいかか入りの 道具と賣  
ちり其あたひ系貫にいりり

萬神都會 二日とりは日  
夫婦のくと禁

出代 出替今日より 来年二  
月二日迄と奉公人の期

とす京大坂の三月五日  
九月十日す年と期とす

非出の野や狗靴のころひちて 麦林  
行基叅 津の玉昆陽川と

ちり比よ一目の顛ありて縁記  
あり忠度のうたひは月も宿り

正行基昆陽院の雜事へ 持津  
正司別當と共に檢校と知ると

云く延元二年將軍が氏素捨文有  
ふつちやいと 佛 亦小を煮る巫

二日灸 二日の灸が 如泉  
二日やいとまたとりのさこのさ

祈年祭 中災方く四時  
なほめんと祈年玉

之背の神祇宮そ祈年今にせにぬ

日四

三

月



三月一日  
長秀御臣  
のりて代を  
そとせあまりの神やうくらん

**京**  
六波羅宮に法盛の忌を  
行入寺鴨川東五條より

**七 薪能**  
南都興福寺南大門はみ  
四座の内二座休暇

うろをほくび十三日まで  
に入りてつとむと之能くも云  
能地うたひの能まざる能が沾徳  
余の能の能のあり通し其角

狂春日の能の能の名うーあ  
とふひの時もいてうろや貞柳

**春日若宮能**  
九日ふ南都若  
宮のまへて能を

勤む十日も洞十日  
八今日白髪  
より千言追門能と勤  
日とぬくべし

**占風**  
東南の風水  
西北の風旱  
**祇園**

**八講**  
八講とは法花八の卷の大  
意と論じり今ハ終り

**九 遺教經會**  
秋そん遠戒の  
徑に京十か  
教迦堂大報恩も又八条大通  
ちりて終りる十五日まで有  
是と訓讀會し云

**泉涌寺舍利開帳**  
十五日  
多へり千をみ松や川流舎通理

**貴船五穀祭**  
北山鹿苑寺祭同  
天神祭社人射あり

**十 成京**  
六位以下の能  
有とのと探じて武部

**十一 列見**  
兵部之二者うほれ出ると上  
はら政官にせしとせと量  
空官位をて入るる上はこ下  
はめ家かかごの死あり

**列見**  
非列見と云石引伸と烏帽の能  
詞百あり能かこれ能あときかご



百花朝

十日とかくいり  
新雨百花朝

台候

十二日 天氣快晴  
あるの實より一  
夜雨うれあし  
大抵二月の夜雨をさくらあへ

南都二月堂永馬大續松

二月堂(羅索院)云天平勝宝  
四年沓門実忠建立を傳に因伽

井有是と俗に表換の井と云は  
井のあを取て修治あり

非麻をむむ都の  
丁史 日叶 日叶といひ

花朝節

百死生日とも云  
善道の中を美

占候

は月と初農の日  
は晴とハ舞之月あり歎らす

蝶會

唐に於朝をいつて  
と撰會とたうはく

替毘市

は日かこの及具  
糸と化こまと微親す

涅槃會

涅槃像三月  
仏のあはれ△さり佛

○は日初迎入滅の日とす  
是ハ月のちやまありあり梅のよ

破形湊に周の標王  
二月十又日佛涅槃すことせり

周の二月今の十二月  
改めこし○釈迦如來ハ人思

教主と稱しと抱戸  
竹の辺安婆死林の中に

志といふ其身れん  
中にも俗東東福ちの像ハ北

後拾遺

光原

いふこのころれ  
く入れ候る候ならま

哥

世とてら月がれや  
保房と梅



あつれやとよみままことひん

⑩ 陸のき。こが。世持る。なも。蔭の林

⑪ 丹。ま。未。て。其。記。さ。ら。れ。や。花。の。時。光

⑫ 丹。棠。の。賦。と。こ。れ。ね。ん。像。其。角

不。く。け。い。の。後。の。花。月。夜。か。日

い。ろ。く。に。鶴。鶴。ら。ん。ね。ん。の。日。揚。降

⑬ 狂。佛。で。し。た。れ。は。遠。途。の。ち。か。れ。や

ね。ん。像。を。い。か。け。た。り。か。け。こ。志。相

⑭ 雪。果。仲。ま。の。節。は。こ。い。ひ。さ。の

⑮ 嵯。峨。△。柱。礎。松。今。夜。海。糸。ち。ち。ち

⑯ 大。坂。天。ま。ち。常。系。日。林。人。の

⑰ 山。崎。寶。寺。親。者。系。行。基。弘

⑱ 南。都。長。福。寺。常。系。會。あり

⑳ 常。系。は。ね。豊。前。△。彦。山。を

㉑ 子。山。か。ろ。老。の。餅。花。前。火。十

㉒ 日。小。花。く。そ。い。て。し。ら。の。ら。い

㉓ 積。塔。光。孝。天。皇。の。汗。子

㉔ 京。本。満。寺。日。蓮。阿。法。あり

㉕ 寺。觀。音。會。式。く。ら。ゆ。の

㉖ 北。六。里。づ。り

㉗ 皇。の。御。建。立。一。坊。あり。修。驗

の。南。に。あり。担。沙。像

の。一。の。妙。著。圓。集。左

八十。就。成。不。峯。定

と。あ。い。ま。ま。の。終。ひ。一。が。十。七。日。ち

兩。衣。の。御。子。の。御。忌。日。は。日。接。接

以下。の。彦。以。系。系。金。後。の。小。路。信

衆。菴。に。住。持。の。接。接。金。二。時

日。蓮。阿。法。あり

北。六。里。づ。り

皇。の。御。建。立。一。坊。あり。修。驗

の。南。に。あり。担。沙。像

の。一。の。妙。著。圓。集。左

八十。就。成。不。峯。定



都なりは日国はげしけれハ世  
に大然山のおまきなりこなり

廿九 貝寄 天王寺 聖堂 曼殊院 華

ゆる貝成位者のころらへり  
わくは日右貝をよしの浦に

ハ新外よりちみこころわ  
は日の月と貝寄月こころり

哥 續後撰 尺数 前改大臣  
今ころにたまたまこなりさん

貝寄や井に青ひあせぬ千那  
観音誕辰 け日と祝考の

廿廿 浅間祭 信州浅  
間嶽

今二月廿二日 八日に山  
はとひられたけ日とやふり

○説 二月廿二日 駿州 倍郡 浅間の社 慶  
重の祭なり是と浅間ゆりとの

能 承あり社介に表と高う  
能らに已ゆるまの砂烟 乙由

廿一 普賢菩薩 奉さかひ  
博多

廿二 大坂 天王ち 聖堂  
人あり子堂と

聖堂院とも云廿二日を子の像  
國策成六時堂なり一舎村

二舎村その外傍院を法事あり  
堂なるの春堂にみまおあり

教よりおにへりてはる是日  
のかかく行いつ、奉天へに

教はけ寺年中の法舎  
中より日儀第一とす大なる

花筒を二律堂の巴偶に  
たつる廿一月 試承あり

哥 源氏紅糸  
かり人の袖ふるこころは

非 聖堂命流 惚さすは流 如泉  
雨雲まをぬかぬてまに々 瓢水



能 我ち此風し吹ぬぞ聖皇天今毛臨  
在 天さちの業成すて 衣よ未  
何となり面ふそらにきこひきこ  
金心糸并勉土退屋

太秦廣隆寺  
舎武をふせ  
は無敵中像

京 後鳥羽院在年加松  
の下衣にこそとほこひ市

西蓮の書いけり  
日四 近江比良  
六海

白髪にねは桓武天皇十  
六年に始りけ日必と凡あり

能 秘の往末とかくきんごる  
能 秘は八海の日や帶霞

五京 北野△天神河原自  
天曆年中北野社を建

供これと公業隆の市供と云日  
右禪院に八講あり公事根源

日二月廿八日天爲大自在天  
神のかとあがり流ひく河川

秀の告ありてとね流天仁  
二年より右禪院ふて八海

菅家の少子ありてはとけり  
云く本朝又禪大は匡衡曰天

後自在天神のありひ天下に  
樹樹一人と補導し天よ

月日こそとまふ成と忍脈し  
能 能中文道の大徳凡月の執

元叡山住心院の徳心教信  
都は聖堂に於て座をと治

云か引りんの棚りのため  
あるらんと付られを是は天神

感ありてよ尔於まふの之事  
水の巻川浪の巻二巻と掛け

たまふとるんそれより庵  
中又傍劫のや一ろ成た

ていけふ星の雲と云い



三月廿五日

或曰是時為深之信と云ふ

河内 遼陽の用此△道明寺

開帳及志貴教士昨村放土

推古帝の物死聖徳太子の御祖

天孫と云はるるに

和の節 天孫の御事

月令 三月五日の事 彼者

西小さくはるるに

南をたると此の事

詞操 紅雲 種まら 入日

狂 ころりなる千万位上あまよ

○林道春野 榎にいとく

家のだん 樹葉落の記を

基ありそこに樹あり二月に

梵天帝 救世の長人

死す生 死 七日修 善業

左 日 直 取 七日 修 善 業



此の春秋七日の事と云ふこと  
とむい事たりたりぬと云碓平  
石の録は彼岸は日本の風俗  
のりくし未だく歳時記に出たり

茶の子 畿内の流俗あり七日  
の間亡人の日と云ふ  
野菜の食類と知音の人ふあつた  
非彼岸舎の茶のゆへは着る白羽

状 彼岸逆僧 片方に尺牘  
我等亡母高彼岸中  
先慈諱晨偶中彼岸

月以因之摘菜蔬供  
會預設蔬齋伏乞王  
靈あいに付逆僧傍況

趾臨敝廬為修其冥  
徑馳聞致度い山路  
福則存没均感賤价

九市若芳出担か奉納  
謹言 ホウ 奉瀆

尺牘 書替 上中下

玉趾 上室樹 御座下 賤价 小伴奉告  
交座下 飛錫 奉瀆 銀鹿以報

彼岸 天王寺参 彼岸七日の  
月傍にやう

出て修りす男女縁糸を中  
中も婦人の衣類をかさり我  
よ發ひ出て去たといひます  
りおの衣忌泰いといひし

非 彼岸といは彼岸は吾心日と云ふ  
内んんひんご娘も身あて  
のちの世後をせ死を度か一朝

同 彌念佛 天王寺念仏堂  
ふて法あり

天の子の名をうとして廿八  
の画像を掛けて修りす平此大



念仏寺より持来る又西門を

極東の東門にあたること昔より

其下にありつゝ西海の入口と

記さるし弘法大師も西門

よて日想知と修したまひい

まひがん中日の影をまはは

入目をあがまんがためし

開むるやうさうひびくのきあゆ漢

京 伊景堂△時宗踊念佛

み條橋西にあり毎年

表秋二季の彼岸踊念佛

あの中世と末尼を携へたに

扇と制す伊景堂扇と拵とを

ちり成秋長光寺と云ひこ

そらに仏身と謝して余念

なぐれらるる所と云ふの事

法苑徑ふいふ義あり

一遍上人

とねばる子ねどふおどねま約の

法の及よいとやねどふりんとて

狂世いこれて表法の後おとえて

々々伊景堂踊念佛 声可

社日 立春ト入みつめの戌の日

と春社と云ふにこは

土の神と云ふく土の動物とやし

かひ五穀と生す春の農事の

よからんる戌の日は秋の其辰

徳と報する意なる燕の春社

日にあつ秋の社日と云ふ

排うへおねに々々教よ慈め斜水

社日 左傳曰共工氏子

好舟車のいりり足の達するは

能水と云ふは龍水と云ふ

平く故に祀りて社とす勾龍

と風俗通云々脩と云ふ

方壇 壇と築きて土地の靈と

祀る豊饒と云ふ

陳王分肉 前漢陳平里中の

社の宰と云ふ肉と

社日 立春ト入みつめの戌の日

と春社と云ふにこは

土の神と云ふく土の動物とやし



分事甚ひとし 父老曰善哉陳  
孺子嘗宰たるや 陳平曰嗟乎我  
と天下の宰たらしめばさかば  
肉れごとし云々

治龍酒 社日よのび酒と云  
石林詩話よき

社日よ酒とのめば 聾と治と  
こつかならりたる故なり

詩 兵部李濤

社公今日没心情  
為之治聾酒一瓶

社美 唐吳越の俗必美  
と以て祀るところ

社翁雨 社翁はうら水と食す  
故に社日雨雨と云

詩 社翁雨五言詞

幾點社翁雨一番花信風  
社日ノ雨ハ草木ノタニハ父母ノゴトニシカ  
モ年中一番ノ風ナリ

詩 社日七言詞

今朝社日傳針線起向朱

櫻樹下行 社日ニ女ハ皆ハリニトナ  
ヤミ見トイハル花ニ行遊

男女嫁娶 周禮媒氏の注ハ  
陰陽交て以て皆

礼と云すハ天の時に順ふと云  
されば月婚姻と云

紙鳶 春の風ハト云りして上  
のぼる紙を云うて起る

非 ちね板や履なま引張き支考  
秘考云や送志と抱て送考百猿

狂 狂いのをり云あけてつれぬの  
ゆいひさしりくとなり 木端

紙鳶 故事 風形 箏ハ琴ハ漢李鄴  
營中ニヲ井ニシテ

戈鳥ヲツタリ線ヲ引風ニ乗シテ  
ノボス後ニイカノ首ニ竹ヲ以

笛トス風コフクメハ聲ニキスツ  
声ハ箏ヲヒクカニト



未央宮ノ遠近ヲ量

漢高祖陳豨ヲ征スルトキ韓信  
紙寫ニツクリテ遠近ヲハカリシナリ

得子 二月乙酉の日の午ノ時  
夫ぬわ抱にをハ必孕じ

初雷。初電 仲春に初  
めて發し

けいしん 虫動く也 俗に虫動し  
ると入雷のま 妾の博物堂

古今集

天のふくまをさあらしから  
ふり入中とんころもの

詞 けいしん。とろうく。ひくく。

こま。おし。たま。

能かまぐに海とちの折や左近

雷や他のまのまのの 嵐雪

雷の姑るれやふの父母

狂おとらふ名よひへともあそ  
ぶらよしなふおとらふを 遊山

詩 雷七言對句 詩楚

響滿山河傾地軸 擊枯株

光乘風雨入天都 急雨過

三國英雄空失勢 對雷光

一鄉孝子為傷心 聽春雷

詩 雷五言對句 詩五言對句

山鳴喬木側 滂沱無所避

水激蟄龍飛 霹靂不堪看

雷電 人君之象 雷ハ二月ヨリ  
百八十日ノ間

ニ地ヲイヅル民萬物モテタ  
地ヲイヅル八月ヨリ後百八十

日ノ間地ニ入ル万物モニク地ニ入ルハ  
害ヲ除キ出ハ利ヲ興ス人君象



### 雷槌

陳ノ時蕪紹ト云人雷槌重廿九斤十九モノヲ

得タリ宋ノ時沈活震木ノ下ニテ雷襖ヲ得タリ斧ニ似テ

孔ナシ○時珍曰雷書雷神ノ佩ル所ノモノニテ其落ノコリタル

モノナリ云々

○本朝ニテモ雷ノヲ千タルアトニテ

異物又ハ矢ノ根ヤウノモノヲヒロ

アル一諸書ニニエタリ

雷除ノ守 越ノ白山鶴也

有其ノちと畫ニ持サズバ雷

雞トノガラク左ニ居アリ

○哥後モ將院御製

白心ノ松本陸よかく

るのてやそくにをさる



### 候霜

霜ノ目より百八十日

又秋居はじめてゆより来る日々

十八日のおよりをぬるなり

### 氷口祭

掃ハカにありされハ

代水と引入ル口と繋るくまら

湧りれハ苗瘦深りれハ苗腐八九

日と徑て苗くハハハハハハハハハ

もハハハハハハハハハハハハハハハ

の冷暖々をこれよりて氷口とあ

らくめまどころま考へらりま

はるハハハハハハハハハハハハハハハ

さしてありはさすなり

○夫木

師光

ますらうとらうまのうふい

まて水にまらるやどハハハハハハハ

○非 ありの及十原とのをば許六

ありの及十原とのをば許六

### 田畑野山を焼

芝焼。早を

ハ地と焼て捨る雨あり是を

火柴といふ和名やこころ



て焼て後耕ことわりり又田畑  
とやくりの根ねをこらめ  
心とやけの性せいよくしるなり

哥 古今 業平  
まどのかりいよやをこらめ  
つゝとこりれり我もこりれり

萬葉

をこりれりまの土神とやくりの  
焼くぬも我もこりれり

俳 土とをせせうとと焼言水  
神とやくりや岩の南に下れ左久

畑はたけやまのぬらたきけ  
狂 やとよまごんもふと  
死火の神かみちせ後もやくりへ 太中

季 御讀經 二月八月に内裏  
此僧と茶とくへひき葉はこりへ

能 ながく香か漬じのいと茶ち外がわ芭蕉  
此部このへから二月一ヶ月の  
草木のふいとありむ

草木

此部このへから二月一ヶ月の  
草木のふいとありむ

苗代

先初種まきの徳とくへ入いり  
ると川がわあに漬じし後

取出とる又七月と種たねて佃田あつたよ  
あなりこれと苗代なへしろより入

哥 夫木 俊成  
たのりたのりなまなまと川がわとせせけりけり  
こりぬらるるみとろの種

拾玉集

あなりと田の徳ハ苗代乃  
あよのこりれり心こころひくらら

堀川百首

又後せハ小田の苗代なへしろありて  
たねちたねちく種たねあけぬるち

連 苗代なへしろもち枝えだちちちち苗代  
苗代なへしろは秋あきとああの田た面めん部ぶ昌昌吐

俳 苗代なへしろや茶ちひひ種たねて代しろのみ支し考  
水みづ澄すみて種たねの芽めまま苗代田

狂 まやろと人ひとのつとまろとさし  
縄なわのままささくくここんん色いろ良よ木

苗代茶菓

二月ふたつき実み熟じやくままこ  
小巻こまきのぬぬれれぬ



哥 夫木 苗代菜莖

小山田の苗代くこのまゝこて  
ころつたのころまゝはりくころ

非 菜莖の美も秋とて年たう苗代田天川

種浸 菜とてあるにせん彼等の  
ちん種とあるにひん種

詞 後よりかき種と下す  
詞をひ伏し種と下す

哥 千首 為尹

種井 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

湯種 農人種とぬる湯は湯  
てやけが種とぬる湯

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家

種時 種と漸る井と名づく  
新選六帖 為家



哥 万葉

雲そくく垂ぬの上はさわりひの  
もえ生るまよなうにうらうら

哥 丑槐

山道のなほのこころひみとて  
かそよまは又舞もほほむら

詞かきこもひ。こころひ。こころひ。  
のりそひる。小舟。かきこもひ。

連 けつさねのちうとすまの歳が紹也  
「さつらびもあまのね」うま玄仍

非 ぶらうひの草まや栲の先 蓮三  
「あまびのけな栲の内の」

狂 ふうりあけさむさうこふーのあうま  
まこくふらうらうらびぬ人遊山

詩 蕨薇詞 杜子美

雨足空山少 蕨萌春深直  
直 直 直 直 直 直 直 直 直 直

直 直 直 直 直 直 直 直 直 直  
紫紫金並六郎ビノ名也

伯夷不食

周家粟未先知此味清

昔白夷力首陽山ニカクレテワフボラ  
喰ノメタルユエニ今コノ味ヲシルソレニ  
テハシラナシダテ  
アラフトトリ

詩 蕨七字對句

承露未開 仙女掌 元無骨

擎天先出 小兒拳 已作拳

口中藥 了らびあやさこがあさ  
まやまこみか昆布の石付まやま  
まを合せて指ははくま念こめ  
典癩之藥 ころらびの粉とみりける

蒲公 僕公嬰。蒲公丁。黄花  
地丁。白鼓釘。金替

和名 ぶちま つまこもりつみたん  
不つこもこもつらうらうら

哥 花さくも人やいさめのはげみ草  
若うら世のまをまれし

公通



⑥ たるやや 蝶子一さし者よの書  
ふり袖の端はらうはくさき野枝  
狂たん何のまこしものれ 献まど  
えはく 籠とやゆこたり 左久

杉菜

土菜のたけてきふと 逃た  
るさつへ或ハ形土菜に似  
て別よとてさるとらる 州ありともつ入  
。大和赤州白茅菜は似る 形まなづく

哥 藻鹽草

かこのまけがこりけはひのさう  
よまよまよーてのつひくこま

狗脊

⑥ さうびもこまけはひのさう言水  
かこらわくびま 似て味あつる  
大さうびと名づくなり

⑥ 異名 尔紫蕨。蕨。迷蕨。  
能狗脊はさうびのさうの(さう) 春理

枸杞

本州に曰枸杞春の青精  
子と名づく 夏ハ枸杞葉

と名づく 秋ハ却老子と云を以  
地骨根と云。地骨皮と云。根は皮

抱杞 逐犬

居テ一日水ヲ汲ケルニテ犬ヲ見ル  
孺子是ヲ逐フテ抱杞ノ叢リ生ケル

下ニ入ケリ是ヨリ是ヲ服ニテツイニ  
仙術ヲ得タリ列仙傳ニ王文真

ト云フナリ  
能枸杞めりと書らうも抱杞は防 飜吾

⑥ 痔菜 抱杞の根つきはらう  
煮て蒸へて入べー 酒と治す

五加木

⑥ 昔 考傍の腰のて 尻の五加木 涼平  
都てもこいさまよ五加木 甚枝

虎杖

⑥ 虎杖の味は 皮は 酸  
名余の出る 古名タビ 山中この  
高丈余のおおし 夏杖はあつとつら



虎杖 うしかのしや 日本紀反正天皇  
淡路宮 たんろくみや 淡路宮ニ生タニフ

井ノ水ヲ汲ミテ太子ヲ洗フ  
時タチヒノ花オチテ井ノ中ニア  
リ故ニ御名ヲ多遲比瑞  
齒別天皇ト申シ奉ル

狂内本ハ扶桑ノ記ニハ  
かたけてもとの虎ノ尾ニ  
挑綺

葦 あし 異名 長生葦。翠髮  
和名 古美良 ふるみら 美良 みら 石葉集

中心莖と抽きて白糸をひらく  
生ものこの山をこらとり入る

能致る香は葦のみれ髪 陽水  
耳へひのへると出す 生まらの

汁と能ふ合せ耳へはめてひの  
はらざるものとよまておまへし

蒜 あし 異名 美蒜 卵蒜 和名  
比流 ひりゅう 蒜 あし 小いこホヒナリ

ハニクムノ心ニ香  
臭ユエ名ツク 野蒜 のびん 皆食之

葦蒜 あしあし 故事 倭德尊  
日本紀景行天皇  
皇弟ニ御子白

本武尊東夷征伐ニ玉ヒ山海ヲヘ  
テ信濃ノ山ニ入既ニ峯ニヲヨシテ

ニ飢ツカレタニヒシ故ニ山中ニ御食  
ス山ノ神コレヲ見テ白鹿ト化シ玉

ノ前ニ立テリ王アヤシミテ一ツノ  
蒜ヲ鹿ニ彈カケレバ眼中ツテ

死ニケリコニ於テ忽道ヲウシ  
ナヒ出取ヲシラス時ニ白狗来テ

王ヲ道ニキテ出ル  
コトヲ得タニフ

源氏品定 げんじしんてい  
この品を定む

たまたまいふことかこのころか  
るこころかといふはすくせといへる

あや あや 薤露之歌 さいろのうた  
齊の田横カ  
門人歌ヲツ

あや あや 薤露之歌 さいろのうた  
齊の田横カ  
門人歌ヲツ



クリ 薤上露何晞明朝还復落

コレヲ薤露巷里ノウタトイヒテコノ

人ノ葬リヲオクル時ニ

ウタフタリニナリ

**夜雨剪**

郭林宗友人ヲ見  
テ夜雨ヲイトハス

非ヲ剪カテ炊餅ヲツクル今  
洛人コレニナラフ 杜甫詩ニ

詩 夜雨剪春韭

俳 東山ヤウ藪ウラヒタル薤ハ和野坡

韭摘ニ隠居の笛ふるさうれ 言水

薤ハふるまふ本の根も糸糸糸 芭蕉

狂 陸こひて捨ておさうまんまの  
嶺うはと人白ふなりなり 平田

**妙藥**

一丸とくくみの肘の内らふく  
を付とくべし 男は左り女は右のふと

疥ノ藥 薤ハふるまふやと枝テの  
肉こそおり付てより

瘡藥 じんく 三胡椒  
五分 右搗合せて

薤ハふるまふやと枝テの  
肉こそおり付てより

**薤**

のり死せんとする時ハ  
大いんく 四五の皮をととさ路の

不ろうりのあつま士一塊にすを  
ませ汲立のふにどくの又澤とさう

に中へそくくべし ぬまり

膈藥 薤ハふるまふやと枝テの  
白

みとをく 搗くして用也

又薤蒜 とくひては中のふにひ  
を去るうはははかようさ 酢とこ

かしてはさそくをこしてより



**水葱**

一名 薤菜

○三才圖會にありあひひ薤菜ニ  
あり紫色低くまもこいしよ三

種あり。波高。又搗杖。水葱

こまは名別薤菜なり

哥 万葉 大伴宿禰

まを散らさるるの里のうへこなまこ

苗有るのふりまひこいへん

俳 水葱搗となまや焼くこひん半月



薺花 異名 護生草 三線草  
こりく花白 小鬼は

草の葉とににらこふに引張  
ひけバ三味線の音に花の根のじ

◎家集 好忠

庭の面ふかろふの花のちかへと  
よまを清ぬるうとそふり

◎狂 ひとくこの味せん草の名こそ  
なつるふとこそはけはぬらあ鯛

菜花 菜のしほはかたふ入菜の  
なぬ 非 ぬのたぬし連二  
やうちのな

大根花 大根の花 非 一亩方  
ほとを付たり

鬘草 かづら草 非 かくと梅の下  
なするさされ 舊室

末黒之薄 袖中ゆに竹の  
葉とさとの入

一はよここの毛ふのまのよと  
とらふらふり

◎哥 夫木  
下ゆえのすくろをばらふまをよと  
やけのくすは草とらふらふり

◎草芳 萌ゆる草のひは  
あつとつてか

◎非 芳一やつきの心の香解す才磨  
芳草生今 王孫遊兮不歸

◎詩 芳艸之詞 文選 枚斬  
芳草七字 對句

◎情如芳草連天碧 穿巷陌  
如有情

◎身似楊花盡日狂 如有情  
カラダハアサヒアリクム

◎草若葉 若草といふて

◎正月の季あり 少長ト  
たるといふ菊の若葉 鳥乃

◎口か葉 秋れより葉  
若の葉少ぬるもたはを

◎非 若の葉少ぬるもたはを

◎非 若の葉少ぬるもたはを



完帳のねねのけしんや神のあま 支方  
愛ふ遠坂のやんささるるあまは

萩之焼原 あまののけしん 萩のともろも  
つゝ。萩の生ひ

初る黒さ芽あり是と焼也  
つゝ其外説いらくあり

いまごとけぬびらりあり  
爰ふつゝおさるるあまを力  
燃骨と心得てよりめり

新千裁 寂蓮  
てふあつてみしおのちふふ  
つゝいれえるささるるやけ

非 焼くもたさるる萩のままが雷安  
やけもあまのあまのあまの東鑑

芦角 あつての 芦の 淮の 角 祖方 全章  
第〇 葭の甘んじり

我らに耳よりく何れありけい  
あつてつゝせつゝあつてつゝ

非 流依あつてつゝあつてつゝ  
角のりおのほけいあつてつゝ

狂 かしらあつてつゝあつてつゝ  
りこつゝあつてつゝあつてつゝ

詩 七字對句 野相公  
紫塵嫩 葦人 拳 手

碧玉 寒 蘆 錐 脱 囊  
アツてハキリクフク 出タカサト

艾摘 よもぎつひ 通信達の手を月の法  
又食あつてつゝあつてつゝ

家集 好忠  
あつてつゝあつてつゝあつてつゝ  
今ハマツてつゝあつてつゝ

夫木 俊成  
かつてつゝあつてつゝあつてつゝ  
あつてつゝあつてつゝあつてつゝ

百人首 實方  
かつてつゝあつてつゝあつてつゝ  
あつてつゝあつてつゝあつてつゝ



⑤ 加がげらる地を九折せよのまゝ 由水  
ふり袖のころれ白ひりよと和 晩水

奴薬

艾とくせせ 服肛と浸け  
ぬに治す 痔瘻病 ころりて

若紫

異名 紫草  
目に向て用く根の

皮を衾布を染る昔のころりて  
衣と染りし是とそり衣とを

伊勢物語

かどがねくあひとれすり衣  
志の人のみならかたりきも皮

⑤ ちりこけ美むとれはむじぬ  
くこれゆりのほろりきりきり



接骨木花

まま葉にえた  
つて花をさる

おろし十花攪練す 臭気ありとよ  
おて後よまふあり本と煮してお撲  
傷抜と洗して功有ころり骨  
と搗ぐの文まなかり

⑤ 関五の母に号し 樹皮は花寛来  
疝氣薬 木の皮に其草入てせ今

银杏花

異名 鴨脚 花の皮  
青白く二葉は花用

⑤ ちりあつた人号さるるの掃  
くういたぬの由り 根皮は花整 芭蕉

紅梅

香道つへの人むと似  
くもぬをばして花のよ

紫梅

お名ハナロシ 花の皮は花  
おかり一花は香あり付り

麗枝梅

お名ニヤカサの花をけり  
ままたひきとす花二花につら

紫梅

お名スガカワの皮をね  
びて葉は花用 花二花につら

服梅

花大して花に似たり二月のま  
花はく 赤山御堂門の庭のま

新千載

元補  
右のかに 花あり 花あり 花あり  
ありきりくハ花あり 花あり

⑤ 新後拾  
香このころりやまこり花梅の赤  
くまのねとく白ひりりり



うりかろる梢の雪の舞あけよ  
くれま井うすたれぬくくれ

哥 後拾遺 不捕  
梅の花香はらけに白くくく  
うくくくくくくくくくくくく

哥 家集 道達院  
梅の花散るは日影くくく  
か面の雪は枝にをくけき

哥 類題 紅梅連 雅世  
まふらふまふらふの梅の紅を  
梅の紅を梅の紅を梅の紅を

詞 朱の唐。紅の雪。くくくくく  
。林の本末に梅くくく。由くくく。くく  
くく。紅のくくく。あまはく。未

非 紅梅ハ巨魁の火をまぶる人  
紅梅に足りてなぐ老人の角

狂 ましくまひくくくくくく  
花まらうくくくくくく

詩 紅梅詞 貞柳 韓駒  
路入宮家百歩香隔簾初

識 漢宮粧 三千八タノヨキ屋ニ入  
テ歩テミレバ紅バイ

直 疑夢到昭陽殿 一簇輕

紅 洗淡黃 昭陽ハ前漢成帝ト  
イフ王ノ威ノ井タル

殿ナリ紅バイヲ見ハハツノ殿  
ハユメノウキタルヤウナリ

詩 春半花終發 多應不奈  
寒ハ春ハナカバナレ

識 渾作杏花香 城コクク人ハサ  
今テコロ花ノ井カントハエ

詩 紅梅五字對句 紅梅五字對句  
照溪如濯錦 嫩蕊融紅雪

隔 嶺似流霞 繁葩剪絳綃



詩紅梅七字對句

詩楚

春水薄涼燕脂片

香不盡

寒日晴烘蜀錦机

酒初薰

壁詩

蜀州郡閣二紅梅數株アリテ

サカニ開ク時一婦高キ髻ニ大ナル袖ニテ高ラニ倚リテ

モテアソヒ詩壁上ニ題ス南枝向暖北枝寒一種春

風有兩般憑仗高樓莫吹笛大家留取倚闌看

告紅梅ノ盛文

尺牘

庭前庭 満開

蜀錦奪目 傲士

人交云あ三人お招養泉

足下典二三僚

奠

神像奉掛連歌お借り 聖像 共暢觴詠之懷

持幕俟

尺牘 云啓上中下と記と

満開 芳花。芳妍。縹緲。明媚。馥郁。遠土。吟客。佳客。

逸人 足下典二三僚 上公共同遊中君且負僚暢觴詠之懷

上將駢吟筵中催寬興之會 欲試賞遊

紅素返奉

梅下續詠之催趣喜々雀

梅下續詠之催趣喜々雀



子知の生出内席て仕

躍 豈不登臨

如例又三危在後中ひるよ

文楸 附馳使

尺牘 上中下 去務と記と

催趣 促遊。展懐。遨宴

喜々雀躍 快衆心。想甚欣然

上 称快万衆 中 何喜如之 豈不

登臨 上 步而捧誦 中 詰鏗金

色 上 入廣夏受奇瑣 中 馳

驚而容吟慰 中 參扣宜唱愛

馳使 介子。僕士 上 貴奚。

遽使 中 嵩价。走方。銀鹿

八重梅 花の八重なるをい

狂 難波の梅をアヤム人とか

俳 八重梅や尾の 座論梅

花浅紅より葉多く実一枝

ありあり人のたれらるる座と

ありあり人がたれらるる座と

越中梅 花大ふりて向く後

黄梅 迎春花とつゆ梅に似て

正月に開く故に迎春花といふ

初櫻。初花 ことごとく重

早く咲く梅の惣名より初

三月草木の部ふくハ

哥 万葉 人丸



哥 續後 伏見院

嘆息をひるか山の花のさかええと  
る遠にうくる炭のさかええ

哥 新古今 家お

わりん人こん志のへたれあ  
たつたのふれおさくく花

待花 花のもとに守りても  
はや花も咲ぬと母の色

哥 家集 頓阿

とくまへて花の本の芽も春雨に  
おはまなまさふさくら下り

哥 新拾遺 俊成

山極嘆やうぬあはれこま  
まこてそえたるまは花の月

排 花やうの花物おそれ霜春  
狂 まう笑うくとてたくとよ花

本の下にこれ 糸櫻 花も  
まうして鳥有

いひ無糸とていついお  
こまひとくにさくかり

哥 あすもこ人志う花の枝あ  
柳の糸よむすほれり 俊頼

排 百すらしもまのたあり糸櫻野坡  
糸櫻もも梢よとねて京春

凡 咲い庭も掃々ついとさう北枝  
狂 やちの庭に咲なる糸さくら

むまんだ海の上りて思らん貞大  
アその中こやもんだのやうまれど

今ひいひい 姥櫻 花短  
いひ花の木端

密てま区に花老女の蕾はたは花ふ  
排 花坂といこれいり洗極 立甫

狂 蕾はととさうい花さつらつら  
花さつらとさうい花さつら

兄櫻 花白も花辨内  
抱てあり花は花

排 ね人のえるののい  
せんんさくら 鯨花 一重極 花

哥 花はさくらさくら花は  
たひいさくらさくら花は



① 非 花て出る一をど 彼岸櫻  
一を極うまう十丈

② 花の極うまう十丈 咲く頃十月十日  
あし春分の日ころしは花極の

③ 那極なるり 列名をへり 事伴  
④ 非 花のうまう十丈 花極の極目

⑤ 狂 草のうまう十丈 花極の極目  
すらんあまう十丈 花極の極目

熊谷櫻 花の極うまう十丈 花極の極目

⑥ 種 植 草本の極うまう十丈 花極の極目

⑦ 接 穂 異名 接頭。小葉子。  
壓木。盤砧。花の極目

⑧ 果の極うまう十丈 花極の極目  
たるととらほくべり 接頭なる

⑨ 花の極うまう十丈 花極の極目  
らに緩うす皮と骨とをひち

⑩ 花の極うまう十丈 花極の極目  
がらぬ中へはすべり 春分と節

⑪ 花の極うまう十丈 花極の極目  
とするもあはれりかじ 葉を

⑫ 揚 植 とはげば 酸とまう 株  
に極とほげば 金極とまう 葉

⑬ 小 櫃 を 使 げ ば 葉 極 と ち ち  
⑭ 新 撰 六 帖 光 俊

⑮ 花の極うまう十丈 花極の極目  
てく八を咲うらるは花極うま

⑯ ① 小 刀 の 毛 け っ ち 接 植 植 蓮  
② 新 撰 六 帖 と は 二 色 なる 極 本 由 水

⑰ 接 植 植 の 毛 け っ ち 接 植 植 蓮  
⑱ 極 本 由 水 の 毛 け っ ち 接 植 植 蓮

⑲ 茄 子 栽 秧 ますし 極 時 疏 黄  
⑳ 根 にかきて 泥を以て 培ひ かけん

㉑ 子 にかきて 泥を以て 培ひ かけん  
㉒ しろこーふり一尺

㉓ 肥 地 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑  
㉔ 肥 地 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑

㉕ 土 と 壙 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑  
㉖ 土 と 壙 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑

㉗ 土 と 壙 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑  
㉘ 土 と 壙 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑

㉙ 土 と 壙 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑  
㉚ 土 と 壙 二 坑 と 不 二 坑 二 坑 二 坑



種蓮

ころねと葉のせいで  
ろろろいなる泥を包む

栽へし挿

挿壓 本の下枝の土  
油をこま

分きり目を入れたら泥土を  
其枝の上にも本の方よかに土を  
分本の方よかに土をうけす糞  
あどぬく土の上をうけし次のもの

本木の方を切りて九月下旬に  
栽へし五月梅雨の時分根を生

つるものを知るべし 今月木屨  
躑躅等こせしはぎにしろはし

壅培

根本の土をやわらけ糞  
と令べし 石榴梨海棠

多にけしはしを糞の袋にころし  
回糞よく或ひは馬糞を用へし

挿木

此法の黄土と日に干細  
未してぬと名かじ師

よくまへへ六七寸はうり地に  
はきかこめて枝を馬の耳おろく

にそぎ同し大ききころる列の  
本の枝を先穴とあけ其穴に

そぎたる枝を五寸しははきぬ  
水とそぎ陰地より或は上より

おひきこころ一日をひかり  
に至して根を生したるは極し

栽のべし 今月日本に  
檜栢 樅丹栢 羅漢松 海紅海

棠 山茶花 石榴山礬  
薔薇 黄梅 櫻等し 抹薬種

根 沈在中か茶漬はいく  
は草葉を採るる多く二

月八月と用ひるからす  
二月の牡丹の芽は八月の苗は

だつとす放よとらに安ん  
つと茶葉はあし宿根あるお

ハ別苗生木こころつら  
時取べし根たうていまし

修樹 菓樹の小枝枝を  
実をひきとと大まき

修樹 菓樹の小枝枝を  
実をひきとと大まき



生類

は教よの二月二月  
の生類をのこと

果鳥

か不よ鳥。か不鳥。か不鳥。  
は鳥。は鳥。は鳥。は鳥。

哥 夫木

光俊

のらるる三宮のふれこをの  
ふらふらとてをあらうら

哥 万葉

のらぶよとてく果もふらふら  
ふらふらとてをあらうら

排鳥也や二足の不三のめてう方美

雉

異名山野雞 前漢  
の高祖の夫人呂大后の漳と

和名木々須 昔ハ鳥ハ雉子魚ハ  
鯉と名上と云るハはまてその名ハ

雉子たおさきりのこ内湯屋の  
うふかやとてをあらうら

其外ハ公うたてとていせお後ハ月  
むらに木のつな枝にほとほけて  
哥 貴たのびそがためたとおる死ハ  
と死ハもつらぬおはとあうら

雉七字對句

詩礎

田夫就餉還依草 共啼花

野雉驚飛不過林 起平原

雉之詞

白雉振朝飛 声来表太平 朝廷

若鷄鳴 灵鳥ノ至ルハ鳳凰ノ出ルカ

童子懐仁至中 即作賦成 皆雉

北異君看飲啄 耿介獨含情

未食スル体ヲ見ヨスヘテ

諸鳥ニスクレテニユルナリ

雉之 春秋ノ時衛公

傳 悲 女齊ノ太子ニ

嫁ス太子死ニテ女葬ニ往ケル



カ遂ニ帰ラスシテ死スツノ  
傳母コレヲ悲ニテ女ノ常ニ

ヒキシ琴ヲ塚ニモチユキ弾  
ケルトキタチニチ塚ノウチ

ヨリニツノ雉トヒ出ヅルヲ  
見テ傳母イヨクカナシニテ

琴ヲ鼓テ雉操  
飛操ト云衆ヲ作ル

魯ノ恭王中年ノ令トアル其  
所ニスミケル童子アリ雉ソノ

傍ニアラドモ捕ヘズソノ故ヲ問  
ハ雉雛ヲツレタレバコレヲ捕ルニシ

ノビスト答フ是恭王ノ政令ヲ邪  
ナキニヨリテ虫境ヲ犯サス鳥

獸ヨク化シテナレシタガヒ童子  
コノ仁心アリコレ三異ナリト云リ

燕 同巢  
和名豆波久良女  
異名乙鳥

玄鳥 鷲鳥 鷲鳥  
鷲鳥ノ和名也 鷲鳥ノ和名也

天女 天女  
天女ノ和名也 天女ノ和名也

春 春  
春ノ和名也 春ノ和名也

建久元年百首 定家  
建久元年百首 定家

家集 頓阿  
家集 頓阿

千首 師兼  
千首 師兼

毎日百首 為家  
毎日百首 為家

二月のすまゝとありあり  
とやくも木をほららめや

詞からびすびのめと名 異名ナリ  
詞からびすびのめと名 異名ナリ

みだこのひまのひまをさかして  
まはらうららかにく癒うま

けまも古葉のたてやまはしの  
やどとともをぬはらうらま

あつらひすびのめと名 異名ナリ  
あつらひすびのめと名 異名ナリ

あつらひすびのめと名 異名ナリ  
あつらひすびのめと名 異名ナリ



尾端の。かつしぬ。あし  
又けつる系。かこころかきい  
連るの目とから射鴉の意が宵拍  
翻信をうに付て入る箱蓋。連二  
清とある孤燕の影。か。祝水  
空を飛ぶとぬけ遠る社のある 向隠  
山の塔に燕をくると入日か 其角  
たてまにまをうづらうづらうのづらう  
うづらうのづらうのづらうのづらう  
たてまにまをうづらうのづらう  
はむらうらうらうらうらうのづらう

詩 燕之詞 白樂天

羽族知机社日来翻身尋

主人樓臺 社日ニハキタルヒルガ

還下度柳穿花去又来

其飛カケルイキラヒハ雲ヲオカニ兩  
ヲクミリ高クモヒキクモトヒテ柳ヲ

行テハカヘリスルナリ 兩翅拂殘

花露水一毛不沾地風

埃 其飛アツバサハ花ノツユハラヒ  
テ地ヲ吹ク風ハカフムレトモヌコシ

烏衣國裏風光好

養子成時便帶回 烏衣國

任山園ナリ其園カヨロヒキユニ子ヲ  
ヤシナヒエテハ又子ヲツレテカヘルナリ

詩 燕五字對々 口上

風簾雙過景 夢遠鳥衣巷

画棟並棲身 心飛白玉堂

詩 燕七字對々 詩變

羽翼不沾寒食雨 經春雨

夢魂應遠落花泥 逐暮雲

燕 肇

燕子國 唐王梅海撰

几三舟破板一枚



取ツキテ一ツノ鳥ニ至リケル  
 人來テ王榭ヲ見テ是我王  
 人ナリトテテテ宮室ニイザ  
 ナイムスメヲ以テ榭ニテアセ  
 ケル然ルニ其人ニテ黒キ物ヲ  
 着タリ榭ニメニ其故ヲ問  
 テ是イカナル國ツ答テイハ  
 ク鳥衣國ナリ其後榭家ニ  
 歸リ梁ヲ見ルニ例ノゴトク  
 ニツノ燕サヘツル榭コノオイト  
 カノ止ニル所燕子  
 國ナルヲニヒリ

**石燕** 零陵

山ニ石燕アリ雨フル時ハ飛テ  
 イケルカゴトシ雨ヤム時ハ还テ  
 石ト生言  
 詩經天命玄  
 鳥而生高〇高  
 辛氏ノ妃郊禱ニイノリ  
 テ燕ノ巢ヲヒロヒ食シテ  
 契トイフ子ヲ生リ  
 後ニ有商氏トナル

**玉京紅縷**

宋ノ女姚王京  
 カ家ニ燕巢ヲ

ツクル其子生育ニフトモニ  
 去ラントスルトキ王京ガ臂  
 ニ集テ別レラツク玉京紅キ  
 糸ヲ燕ノ足ニ付オキタレハ  
 明年ニタ其糸ナカラニ來  
 レリカクノゴトクスルコト六七  
 年ニシテ王京死シタリ燕ハ  
 カナシク鳴ロタリ終ニ塚ニ至テ死

**避戊巳日**

廿日ハ泥ヲフク  
 ニズ廣義見ユ

**貞燕**

元ノ元貞三年双燕柳  
 湯佐ガ家ニ巢クク或日

雄猫ニトラレケル雌燕其雛ヲ哺  
 翼ナリテ歸ル其後毎年雌燕ヒ

トリスニ來リテ同巢ニアリケル  
 一六年見ル人感号貞燕ト云ケル

**妙藥**

淋病藥 燕とこそ  
 あるよいて合へし



便毒ヒトク口クノノ燕ツバメのノ殿ノトトたたいいのの  
年トシ房トシ子コ等トかかににししとと醜みにくくく付つじじ

歸き鴈がん (異名)陽やう鳥トウ 霜しも信しん 拜はい書しよ  
使者しや今いまののアアいいぬぬアア

風ふう呂りよ 杖じやう丁ていののここららのの時とき本もとのの小こ

枝えだととくくつつてて来きりりはは怪あや海うみにに

其その本もとととひひろろいいぬぬ凡たゞ俗たゞをを禁かぎてて

故こ事こと新あらた 杖じやうのの影かげよよ出でとと

古今ここん 躬こう恒こう

後ご拾しつ遺い 國こく基き

家か集しゆ 定じやう家か

表へのの表へれれ公こう夢むのの考こうもも收しゆぬぬるるよよ  
たたののむむののアアののいいええささままららん

詞し 口くににははくくれれにに海うみのの清せいををれれりりののううららむむいい

連れん ありあきききき屋やががのの送そうるる柳りゆうはは 宗そう牧ぼく

月げつのの月げつふふかからら琴ことのの琴ことはは 紹せう巴ぱ

野の水すい 野の水すい 野の水すい

狂きやう 常じやうかかららちち下げひひももちちるるううぬぬれれ方かたのの

ここののああららううへへたたりりかかりりががのの負おけけ

紫むらさ笛ふエ 紫むらさ笛ふエ 紫むらさ笛ふエ

詩し 歸き丁てい之の詞し

洞どう庭てい湖こノノ水すいカカ春はるノノ色いろヲヲナナスス

時ときアアニニハハアアカカ旅りよタタチチテテ衡けい陽やう

差さ池ち高たか後ご下げ欲よく向むか龍りゆう

門かど歸かへり 差さ池ちトトツツララナナリリテテ高たかシシトトヒヒ



詩 歸雁五字對句

日上

已辭霜雪苦

玉塞情何極

寧羨稻梁肥

薰葭夢亦稀

引鶴

引鴨 冬久春久

久くあまらう 雁の 冬久春久

○相鶴 経いらく 鶴の 功あ

あつるの 陰よ 七七年に 小返し

十六年に 大返す 百六十の ほど

髪止まら 千六百 年ふて 形定

る 髪束を 尚ふ 放ま 色白く 髪

天よ 鳥の 放ま 放ま 放ま 食す 放

其 啄長し 前に 軒ま 後後の 指

経し 天壽量 へく 是 羽 撲 撲

長 仙人の 強強 之 飛時 一 牽 千里

百六十年 以て 雌雄 相視て 孕

千六百 年 上り 入り 入り 入り

食 ころり ころり ころり 聖人 位よ

あれ べ 則ち 鳳之 旬に 翔る

引鶴の 夢に 方 けり けり けり

市代も 毛尾の 海の けり けり

詞も ろろ 夢も まる 夢も あま 夢も

夢も 井の 夢も 結の 毛も ころり

子と ころり。 友の ころり。 かま ころり

引鶴 びん びん びん びん びん 文秀

引鶴 びん びん びん びん びん 文秀

引鶴 びん びん びん びん びん 文秀

引鶴 びん びん びん びん びん 文秀

引鶴 びん びん びん びん びん 文秀

引鶴 びん びん びん びん びん 文秀

引鶴之詞

寄跡含香含淹情加樹林

ツルガレキくノ官人ノ方ニヤシ

任ム樹林 長鳴如 有 許 狎 俗

到 如今 鳴クハ 何ヤラ 誰テモス

不 染 風 塵 色 常 存 霄

漢 心 其 廿八 大 空 二 井 ル ヤ ウ

會 應 王 子 晋 接 雨 向 嵩 岑

イ ツ ヲ ハ カ ナ ス 鶴 ス キ ノ 子 晋 ヲ ノ



鶴の **林浦籠鶴** 林浦孤山隱

ニツノ鶴ヲヤシナフ 縦セハ飛出

雲ニ入テタシシクシウシテ又

籠ノ中ニカヘル 林浦小舟ヲウ

カメテ西湖ノ寺々ニアソフコト

常ナリ若其畱守中ニ客ノ

来ルコトアレハ林浦カ童子籠

ヲヒラキ鶴ヲハナツカナラズ林

浦カアソブ所ニ来ル林浦コ

レヲ見テ **上揚州** 小説ニ

家ニカヘル 日人三人

アツメリ各其オモフトコロコ

イフ一人ノイヘルニハ揚嘉ノ

刺史トナラシ人ノイヘルハ

室多ホシキ一人ノイヘルハ

テアリテ天ニノホラントイフ

其カタハラ二人アリテイハク

我ハ腰ニ十萬貫ヲ纏フテ鶴

ニノリテ揚州ニ上ラン

**化鶴**

神異録曰玄宗以

テコレヲ射ル鶴矢ニ中テ西

南ニク時ニ益州ニ道觀ア

リ道士ドモ一歳ノ間ニハ三

四度来テ遊ベリアル時徐

佐郷トイヘルモノ外ヨリ来

テ羽子ニ謂テ曰我山中ニ行

テ矢ニアタレリトテ則其矢

ヲ壁ニカケテ後日其矢ノ至

来ラバカヘスベシト云テ帰ル

ハタシテ後日明皇蜀ニ幸

ニテカノ道觀ニアソビ其矢

居ニテ常ニ

常ナリ若其

来ルコトアレ

ヲヒラキ鶴ヲ

浦カアソブ所

家ニカヘル

イフ一人ノイ

刺史トナラシ

室多ホシキ一

テアリテ天ニ

其カタハラ二

我ハ腰ニ十萬

ニノリテ揚州

リ道士ドモ一

四度来テ遊ベ

佐郷トイヘル

テ羽子ニ謂テ

テ矢ニアタレ

ヲ壁ニカケテ

来ラバカヘス

ハタシテ後日

ニテカノ道觀

**客来吊**

陶侃傳曰侃

ヲヨシテ墓ノ下ニ在リ勿心手

二人ノ客アリテ来吊フ哭セス



テ退ク促コレ非常ノ人タルヲ  
ニル隨テコレヲ視ニ雙ノ鶴ト成  
テ去ル○右詩故事共引鶴  
ニカキテ又鶴ノコトヲ記ルス

鳥之巢 古巢 ハ栖

云ぬるハ宿ト云拙者ハ止  
ト云衆鳥ハ集ルト云五雜

組ハいこう名ノ巢ト云ハ  
其巧ト云ハさなる只一口西丸ト

以テ猪木ハ其堅固ナル事ト云  
ハ本ト扱トモ巢ハ終ニ傾ト云

哥 うの不好  
かひのうらねのふかへしほの  
子のなるなるなるひゆるる

能 鳥ハ巢ハにして異様ヲ連ニ

孕雀 ハ雀子 ハ雀舎  
巢ハハて鳥ハと依其卵マたらあり  
其子ハ若キ者ハ雀ト云

○ 源氏云はふ

哥 新撰六帖 知家  
人ハうた雀のひまのよなれつ  
志ハ一もたさといふまきさうらん

○ 源氏云はふ

むらさねのうらの釣ひるすめ  
のよといぬさう知はふ一とらと

いふことありこのをををあり  
隊子といふおのをよとらなる鳥

哥 ハハのいぬさうかひとらあを  
たちありしやうしとらとららん

能 一足ハ孕ミすめぬあや三ハ瓦遣  
有るやあかり隊子ハ外ハ陰其角

妙藥 痘瘡の薬 生う存の  
は痛ハハを切テ金筋ハ

世土薬 入息をけりまやま  
こゝあそそせつ用由ハ

女人産の薬 すめらの巢ト云ハ  
きハ香自正綱ト云葛ハ格ニ

十薬ト云ハ内の野ガ子の小使ト  
あつめかききて用由ハ

○ 源氏云はふ



腎茶 崔世羽 氷砂糖 一斤 酒一

升炭火 火をせしめしめて春の時をさす

松尾鳥 菊いたくきこふぬたる  
春松の葉を食む

哥 夫木 寂蓮

深山本のちちる栗よりさうれ茶て  
新茶とつとく松じりやうとて

排松じりるちとせう夫女貞室

孕鹿 九の月より一子を  
生とすり。万葉の鹿

の子のひとりと樹根のよりり

排花つまの煙の後の孕鹿 白羽

鹿角落 角解ともいふ。麻生て  
三年して其角自落る

排豆弱のたうらる麻の角 潘山

麻の角 未山

妙薬 産後目まの薬 麻の角と  
死て灰と産後を利する

はさかこの薬 麻の角 葉 柏 梔子  
と等分に拵じひねりかけては

妙術 鹿の角とあつるかすつと  
輕骨を加えて煮て酒す

蜂 蜂巢 蜜の蜜の肉は  
たたくて冬食ふ

のまより出て花の蜜とてり蜜に  
醗して飲んて。蜜の醗形とす

哥 定家

うき世さくら色の新に蜂の  
とすうなれぬいとく人あう

排効薬 虎骨にあやまる名賢 蜂の  
蜂の巢や干たむぐもさう類 瓢三

素盞鳥のさくねん蜂の紐が 支考

狂魚つらうねるも無さう蜂の羽と  
たくとすうなれぬいとく人あ

加木

詩 蜂之詞

蜜蜂不食人間倉玉露為

酒花為糧 蜜ハキハ人間ノ米ハク

ハス露ヲトツテサ

ケトニ花 作蜜不忙採花忙

ヲ食トス



蜜成猶帶百花香 蜜トスルニヤスシ  
花ヲトルハソカシ

サテ蜜トナリテモ百花ノニホヒカマルソ

故 **蜜糧** カクシツカクカクカクカクカク  
葛仙翁客對食客寄  
戯ヲ見上云葛仙翁餌

吐ク三十蜂トナリテハ ハヤカノオト  
シテ又三納ハ飯トナル 蜂飼大臣

十訓抄京極大政大臣宗輔八山

蜂ヲ何丸ト名ツケ飼玉ヲ故カク

号 **空宙蜂** 神瓊禪師蜂窓紙ニ  
アタリテ出ニトニテ出ルコトアタ

ハサルヲ見テ世界カクノコトクヒ

ロニトイヘトモ出ルアタハスト云

**妙藥** 喰ヒタレラヌ  
松トシテラニハ

女竹の葉と子一葉にきん 三本こ

あ三升入て二升に遠 再 乳の葉菜

山竹の果と葉は 妙術 喰ヒタレラヌ  
松トシテラニハ

たるに地竹と丙す火と二葉と云

口の中よりイイ木と念ずること七

はして其土 **虫** 人トモ虫  
能ト云

どりぬるし **虫** 能ト云  
能ト云

狂 白くひつなふごと同ハハ 能ト云  
能ト云

**蝶** 胡蝶 黄蝶 鳳車 野蛾  
採花使 粉拍 蛺蝶

右 品 秋の穂

とく 品 秋の穂

とハ其心 品 秋の穂

哥 古今 おのゑ 遍昭

夫木 定家

あ 品 秋の穂

あ 品 秋の穂

あ 品 秋の穂

あ 品 秋の穂

あ 品 秋の穂

あ 品 秋の穂



てく人のくろく。おねうらうじし  
香とぬをむ。嘘をやへる

連ころものねよけのさるこ蝶宗

俳夕方中夜に飛ふこ蝶くま其角

俳くろくし妻の暇ゆふ蝶くま曾良

俳待遠し望遠の蝶の死ひ山里

俳是竹有の蝶さる蝶さる川治川

狂蝶くの神さる蝶さるひなれ

人もかぬくわさる蝶さる真柳

詩 胡蝶之詞 東坡

双眉捲鉄絲 両翅暈金碧

ニツノ眉ニハ黒キ糸ヲニキタルヤウナ亦

フタツノツハサハいろくノ色ノメクリア

ルナ 初来花争妍 忽去鬼

アトナシ 初アキタルトキハ花モツノ色

無跡 ヨキヲアラフヒタレドモ去テ

ハ夢ノアトモノコサスカホ

ヨキコトハイトツラトナルゾ

○香鬢粉翅暖争飛 品物

タシタスデヒニツクヒケツハサライロ

多情總属伊 トリアタカナ

空ニトビカハス春ノケニキハ何モカモ

ミナコノ蝶ニケニキヲウハワレタリ

上國万家風月夕 携臺取

次宿花枝 都ナトノ家々多キト

トナレハワカヲモフニニヨロシ

キカタノハナノエタナトニヤトル

詩 蝶五字對句 同上

徘徊穿樹影 乱隨狂絮舞

ハイクハイニエトスガツニシヨニ

暁繞戀花衢 輕伴落花飛

ハナトヒトツニトフ

詩 蝶七字對句 詩楚

翅殘懶舞投幽檻 狂雙夢

ツハサニライメニテユウシニダス

力困慵飛過短牆 謝公名

チカニキニテカキニトナ

蝶 嶺南異物志 三人

驚 海南浮てて蚊

蝶 三儿大サ蒲帆コトニ肉ヲカシ十

介ヲエタリ是ヲ散ハキメテ肥美

二頁



庫中金三錢

唐穆宗ノトキ  
禁中ニ花開キ

ケレハアル夜 蛺蝶數万飛來テ  
花間ニアツマル宮中羅巾ヲ  
以テ撲トモ得ラズ帝細ク空  
中ニバリテ數百ヲエタリ夜  
アケテコレヲ見レハ庫中ノ  
キンギヨクセシナリ

愛花人

長明発心集ニイ  
ハクムカシ佐國

ト云モノ花ヲ愛シテ六十  
年遂ニ飽カスイハク我生レ  
カハルトモ花ヲ愛スルモノニ  
ナラントノ詩ヲツクリテ死多リ  
其後アル人ノユメニ蝶トナリテ  
侍ルト見タルヨシカタリケレバ  
其子花ヲ心ノヲヨフホドウエ  
テ其ウエニ蜜ヲ朝毎ニソ、  
ギテ孝養ノ心ニソナヘタリト  
ソ孝心ノイタリカンスベキト

莊周夢

蝶タルヤカナラズ  
分チカタクアラニ

云く是ヲ物化ト云莊周夢ニ胡  
蝶トナルサメテ周ニサレトモ蝶ノ  
周タルヤ周ノ蝶タルヤ不知

蛙

異名 石蟬 丁子蟿  
蟾蜍 形大 青蛙 色青 蛙

△蛙子一名科キ 秋かけてある者  
どもあさこむり時と季とせり

夫木

家房

これらるるあさこむり時と季とせり  
堀江の蛙子あさこむり

千五百番

家長

まよのふらの山田と来こるは  
鴨のふらふら蛙たぐり

新六帖

信實

まの門はれあさこむり時と季とせり  
岩のうらふら蛙たぐり

家集

兼盛



はあゝ蛙の多し老ふなり  
ふそくやうたんまの小山田

詞すだく。法多。川池の久田。

小田の蛙。あはれ。苗代あり。夕月

夜。心次の夜の雪。あまきこし。

蛙と妻のそれらに。あまきこし。あま

かまきこし。あまきこし。あまきこし。

俳我おと蛙鳴らん西行田 蓮二

園主も雨になれて蛙も 草也

角りこ蛙鳴、江の里の蛙 其角

狂 席にのりを今まひてやよ蛙

上ひひふくくう如まきけい真柳

蛙 龍王海ノ辺ニ

蟹 女子雑説 蛙ニアフテ問

テ云 婦カ喜 怒何如 曰我喜

時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ

テシコレニ次クニ脹 脹ヲモツ

テシ脹リスギルニイタリ

テノ千ヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬 十月国栖人国津物

ヲ献ス此クス人常ニ山ノ菓ヲ

食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝

食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ

ラシ醋ヲ和テコレヲ食ス唐王晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊

人ノ耳ヲ聾スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトニドク、ニ及

バストイヒケレハ晏慙ニ退ク

はあゝ蛙の多し老ふなり  
ふそくやうたんまの小山田

詞すだく。法多。川池の久田。

小田の蛙。あはれ。苗代あり。夕月

夜。心次の夜の雪。あまきこし。

蛙と妻のそれらに。あまきこし。あま

かまきこし。あまきこし。あまきこし。

俳我おと蛙鳴らん西行田 蓮二

園主も雨になれて蛙も 草也

角りこ蛙鳴、江の里の蛙 其角

狂 席にのりを今まひてやよ蛙

上ひひふくくう如まきけい真柳

蛙 龍王海ノ辺ニ

蟹 女子雑説 蛙ニアフテ問

テ云 婦カ喜 怒何如 曰我喜

時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ

テシコレニ次クニ脹 脹ヲモツ

テシ脹リスギルニイタリ

テノ千ヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬 十月国栖人国津物

ヲ献ス此クス人常ニ山ノ菓ヲ

食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝

食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ

ラシ醋ヲ和テコレヲ食ス唐王晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊

人ノ耳ヲ聾スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトニドク、ニ及

バストイヒケレハ晏慙ニ退ク

はあゝ蛙の多し老ふなり  
ふそくやうたんまの小山田

詞すだく。法多。川池の久田。

小田の蛙。あはれ。苗代あり。夕月

夜。心次の夜の雪。あまきこし。

蛙と妻のそれらに。あまきこし。あま

かまきこし。あまきこし。あまきこし。

俳我おと蛙鳴らん西行田 蓮二

園主も雨になれて蛙も 草也

角りこ蛙鳴、江の里の蛙 其角

狂 席にのりを今まひてやよ蛙

上ひひふくくう如まきけい真柳

蛙 龍王海ノ辺ニ

蟹 女子雑説 蛙ニアフテ問

テ云 婦カ喜 怒何如 曰我喜

時ハ清風明月一部ノ鼓吹怒時

ハコレヲサキニスルニ努眼ヲモツ

テシコレニ次クニ脹 脹ヲモツ

テシ脹リスギルニイタリ

テノ千ヤムナリ

毛弥

日本紀應神紀冬 十月国栖人国津物

ヲ献ス此クス人常ニ山ノ菓ヲ

食ヒ亦蝦蟆ヲ煮テ上味ト

ス名ケテ毛弥ト云○本朝

食鑑ニイハク山東人蛙ヲ捕テ

熱キ湯ニ没シ皮ヲ剥キテカ

ラシ醋ヲ和テコレヲ食ス唐王晏

群蛙ノ鳴ヲキ、テイハク此殊

人ノ耳ヲ聾スクス珪曰我鼓

吹ヲ听クニホトニドク、ニ及

バストイヒケレハ晏慙ニ退ク



井堤蛙

袋草子日帶カ  
節信始テ能因ニ

逢ニ時能因今日見泰引  
出物ニ見スヘキ物アリトテ懐

中ヨリ錦ノ小袋取出是我  
重宝長柄橋造ノ時ノ鉞屑

ト云テケレバ節信大ヒニヨロ  
コビ又懐中ヨリ紙ニツクメルモ

ノヲトリ出シテ見セケル能  
因トリテ見ルニカレタル蛙ナ

リトテ共ニ感歎ニ又  
フトコロニシテ帰リケル云

妙術

蛙鳴ノ末泥唾  
此ノ枝の多クと更燒じて

鮎子取

東医室澄に青魚カ  
トコ 鮎子ハカトコ

蒸鮓

着授裁前より出る魚  
太く平焼おとさ遠干て

法がし出る火をいりて合入  
非ひかき辛教ふはぬれ衣 其角

狂かきとひんそつこの塩おひ  
いふといれぬ味てそあれ 道鐘

田螺

田贏一名 田青の胡麻と  
からしとこをいころり

妙藥

痔脱江一法は田螺と六  
あう粉と白粉が放唾せて

更癩とほろ法 田はの白を平と  
ようころり松のみどりと塩不し

はしたると粉とくこくこく  
松脂と田螺の粉を不ど加

うす粉とわろあわめ付へ  
蜷 (異名) 河貝子。蝸贏。螺蛳

總角の猪ひたるかたらのごとし  
ぬに肥す流後の倍ハアゲキ云

妙藥

産後腰痛 破痛と治す  
産後腰痛 破痛と治す

はして付へしあ人もの痛と治す



いず所素 ちのほと二三交解

ときて後港のまきと付し

寄居虫 形蟹こいて港の売よ

一名寄生 彼云朝縣からん

だのおよ一ニスのものあり

狂 狂 狂の上より浮世とて

宿さうりのかひいさる 信海

馬刀 養の如かる野に馬が

の形よあらんまてこまこと

狂 狂 狂の上より浮世とて

宿さうりのかひいさる 信海

馬刀 養の如かる野に馬が

の形よあらんまてこまこと

狂 狂 狂の上より浮世とて

宿さうりのかひいさる 信海

馬刀 養の如かる野に馬が

の形よあらんまてこまこと

狂 狂 狂の上より浮世とて

宿さうりのかひいさる 信海

馬刀 養の如かる野に馬が

の形よあらんまてこまこと

狂 狂 狂の上より浮世とて

必用

はるハ三月一ヶ月必用

破軍方向

夜九ツ	巳の方	夜八ツ	午の方	夜七ツ	未の方
申の方	辰五ツ	酉の方	辰七ツ	戌の方	申五ツ
酉九ツ	子の方	酉八ツ	丑の方	酉七ツ	寅の方
戌六ツ	卯の方	辰五ツ	辰七ツ	辰七ツ	辰の方

日刻

はるハ三月一ヶ月必用

出行作事

西南より

壬の日とのぞくべし 甲庚

樂事

見月と芳菲の味と

拾ひまねと踏と花を

るひより松ハ二月末より大坂



こゝろを極むるほどはなす  
なり酔に乗じて暮と惜そめ  
おるはたのし死めたに  
おしきまはりの日月くんと  
ともしよ偏なき樂事  
中木のときをかりとる

天氣占候 是月卯の日  
三あれの豆よ

素問曰丑に風づらざれば  
人寒熱多しと有り甲子に  
雷あまは大熱と有り雨あまは  
旱なり月ひかりまはるは災と  
て切東に己酉まは秋米價高  
西に己酉は蠶米と有り「災  
ありけ月あまは早なり月  
蝕はまは米安し衣に災あり

二月用之志くは 左る  
あるす

養猫法 云々とはは描と初  
知時給とやれ食長外出るとは

花壇土 け月花壇土とまはし

製筆 け月より三月十日までに収め

制表しく筆と佳とすもハ秋ハ  
九月に取らぬ赤毛白毛と  
はとす軸竹も同じ其は切と  
利も竹と前と利も六とひ入る

毎く酒に硫黄と入して筆の  
毛を洗を舒とす筆の扱は  
果多生 梨も榴も杏の枝も

のをららにほけ枝の下へた  
ひやうよとす一葉あせとす

雑品 葡萄の根と根幹を  
あげおくべし。 檣垣は築く  
べし。 百葉の樹の下と春に  
登りそのよりとて草

木の根らさるねと社田を  
の柄と根よそとくべし 提  
まとも生むるこま一ま  
初年をその柄とかけるとは



養生 二月 天氣 暎暗の日と  
多しと三里 終骨 公 矣

とくし 陽氣とたけ 舟 舟と  
ふせぐ 養に 友に けり 御 養

衝心の やまひ まし こと 習 養  
叢書に 入 けり 但 矣 究 其

人の 病 症 によりて 多し である  
匠 右の 二 穴 にかき けり けり けり

服神明散 養 後 神 明 散 を  
佩 へ 蒼 朮 栝 樓 附 子 烏

頭 罌 珀 細 辛 各 搗 碎  
散 じ 紅 絹 の 袋 じ 入 一 人 此 散 を

脊 じ 帶 じ 一 丸 飲 じ けり  
吐 腹 あり けり けり けり けり

假 じ だ じ の 假 じ して 服 じ けり けり  
あ せ 出 じ けり けり けり けり

子 じ じ けり けり けり けり  
死 じ じ けり けり けり けり

け 子 の 日 假 じ して けり けり  
假 じ して けり けり けり けり

二月 飲食 并 料理 献 立

禁 兔 肉 け 月 け 月  
忌 非 じ 中 け 月 鶏 卵 け 月

心を 黄 花 菜 け 月 痼 疾 と 発 す  
や ぶ け 月 痼 疾 と 発 す

陳 俎 け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

陰 流 水 け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

酸 物 け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

大 辛 物 け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

葦 け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

料 汁 け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

白 とう け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す

ゆ け 月 痼 疾 と 発 す  
疾 と 発 す



鱈 こい。かいろうま  
ゆきくじめ  
りりごけ

白うと。ほくし  
あしそ。ちん  
こい

指 けり  
けり  
けり

二汁 塩かき  
ね

吸物 あつもの  
あつもの

和物 あつもの  
あつもの

精汁 あつもの  
あつもの

鱈 あつもの  
あつもの

和味 あつもの  
あつもの

二汁 あつもの  
あつもの

煮物 あつもの  
あつもの

和物 あつもの  
あつもの

時魚 あつもの  
あつもの

鳥 あつもの  
あつもの

青物 あつもの  
あつもの

梅花久貯法 あつもの  
あつもの

酢 あつもの  
あつもの

梅 あつもの  
あつもの

酢 あつもの  
あつもの

梅 あつもの  
あつもの

酢 あつもの  
あつもの

梅 あつもの  
あつもの



は抽取の死の上をよき上り  
多く入る。抽取の入りは換に紙蓋  
とて人の通へるふも蓋を  
用ゆる時、あはざるとさく死に花  
多し、合れば花開て、さくの時に建  
つる時は、紙のけんをとりはし

蕁菜海松煎法

蕁菜の  
通しきの

あ一外塩一合あり、せ漬を  
色かわくさしてよくたれり

海温煎法

と去塩三合

紙封して、塩を欠く、換せ  
煎る時、あはざると水にけ塩とさ

木芽作法

きのめをつくる  
の目と石基

すしあけ、木芽をさし、これを  
とりはざると、すしあけ

ち日よすと、とくやく  
芽をいごと、とかり



